

東敏徳氏の発表についての

質疑応答

(質問者 1 名)

【質問】 金山弥平 (名古屋大学)

1 頁

藤沢令夫は、もろもろのアイデア上に善が君臨して、実在性と認識性の究極の根拠原因となるという姿はポリテイアのこの箇所ですべて初めて示されてくるとしている¹⁾。

質問：このように特に言及されるのは、異なる解釈があるということでしょうか。

また同時に、ポリテイア以降、善のアイデアがそれ自体で語られることはもはやないとも指摘している。この、ポリテイアで善について集中的に言及されているという点は、教育行政に関わる文部科学省が学習指導要領で「より善さ」という表現を採択した昨今の動向を考慮した場合、ポリテイアをプラトンの教育論として理解する必要と関連してくる。

質問：『国家』をプラトンの教育論として解しうることは自明であって、とくにその点を取りたてて言う必要もないように思えるのですが、いかがでしょうか。また「教育論として理解する必要」と言われている意味が、もう一つ分かりません。論文の中でも「教育論として理解する必要」が論じられているようには見えないのですが、いかがでしょうか。

本発表では以上を踏まえて、ポリテイア国家篇には、問答法により魂の目でより善さを見るために教育を行うというプラトンの教育活動が展開されていると考える。本発表は、この説明が成立するという立証をテキスト解釈から検証する。

質問：「ポリテイア国家篇には、問答法により魂の目でより善さを見るために教育を行うというプラトンの教育活動が展開されている」ということは、自明であって、とくに「テキスト解釈から検証する」必要もないと思いますが、いかがでしょうか。

2 頁

質問ではありませんが、 $\tau\eta\nu\ \tau\eta\varsigma\ \psi\upsilon\chi\eta\varsigma\ \delta\psi\iota\nu$ の $\tau\eta\nu$ と $\delta\psi\iota\nu$ はアクセントが間違っています。

これも質問ではありませんが、染色の喩えは、430E ではなく 429E に出てきます。

質問：どうして、ソクラテス について「無知の知」という表現を用い、他方、プラトンの教育について染色や向け変えに注目することが、プラトンは強制的な方法を用いてでも

指導していくという解釈にそのまま通じるのか、分からないのですが・・・

質問：また「プラトンは教育を政治的理想の実現手段と見なしていた」という表現がありますが、この点ではソクラテスも同様であって、彼もまた、教育は政治の正しいあり方を実現する手段とみなしていた、と言ってもいいように思うのですが、いかがでしょうか。

3 頁

質問：どうして、プラトンの問答法を、太陽の比喩に示される魂の目の協調から考察することが、これまでに提出されてきた理解解釈とは異なる立場となるのか、よく分かりません。この頁の第 2 段落で言われることも、ことさらに新しいことには見えないのですが、「問答法を、自ら向き直り何が選ぶに値するかについて自ら意味を見出していく、魂の目で見えることを学ぶ過程として理解しないような人がだれかいるのでしょうか。

なお注 7 の Annus の綴りは間違いです。Annas です。

注 8 のギリシア語の αὐτό のアクセントも間違っています。

質問：III の第 2 段落の 505C の三つの段階と、第 3 段落の 534B-C の三つの段階が、あたかも対応しているかのように論じられていますが、どう対応するのか、分かりません。どのように対応するのでしょうか。

5 頁

質問：コールバーグを参照することで、プラトンの教育論について具体的に何を明確化しようとしておられるのでしょうか。コールバーグの 6 段階と対応する記述がプラトンのテキストのどこに認められるかを示して、具体的に説明していただけないでしょうか。

質問：同じことはフレーベルについても言えます。「異なる状況の中でも等しさを言えるのだという気付き」に相当することが、具体的に『パイドン』のどこで語られているのでしょうか。

質問：「人間としての等しさ」、「人権の等しさ」のことが、プラトンのテキストのどこで語られているのでしょうか。

6 頁

「教育とはまさにその器官を転向させること」(518D) という訳は、この位置付けの中で理解されると、外在的強制による教育方法として読み込まれる。」

質問：「この位置付けの中で理解される」必然性が、「II 先行研究の問題」では、説得的に示されていないように思えます。

また注 11 では、「向け変え」という訳が「向き直り」と対比されて、前者は強制的な方法

を示唆し、後者はそうではないとされていますが、しかし、外在的な強制によらずに「向け変え」を経験するというものではないのでしょうか。「向け変え」も「向き変る」とすれば自発的に聞こえるし（現に注 11 に「自ら進んで無気を変えていく」という表現があります）、「向き直り」に「向け直らせる」とすれば、強制的に聞こえるし、訳の違いはあまり重要ではないと思えるのですが、いかがでしょうか。

なお注 11 の ούχι は、氣息記号とアクセントが違ってきます。

7 頁

まとめの中の ἔλκει と συνπεριαγωγούς は、前者は氣息記号が、後者はアクセントが違ってきます。

【回答】 東敏徳（幼児教育専門学校・元）

ご指摘いただき有難うございます。特にプラトンの「問答法を、…魂の目で見ること」を学ぶ過程として理解しないような人がだれかいるのか」というご指摘は現場教員としては心強いものがあります。

発表の原稿の中でも取り上げましたように、プラトンの教育についての、教育学研究者による論文著作の中では、全体主義的考え方、優生学的思想から特徴付ける考え方があると言えます。この方向の形成されてきた過程は、ソクラテスとプラトンの教育学研究の中で稲富栄二郎の影響があると考えます。稲富が『ソクラテスプラトンの教育思想』（昭和 55 年、学苑社）497 頁で、「高度の理想主義者」としてプラトンを位置づけた点の一つがあります。またプラトンを教育学で紹介する際に単独で強調されることの多い「洞窟の比喩」で「暴力によって強制され」ることで、これは前掲書の 423 頁です、プラトンの教育が実践されていくというもう一つの位置づけがあります。この方向がプラトンの教育思想を「善さを子どもの外部に、理想として掲げて、子どもはそれに近づくという仕方」で成長する」と分類して発展してきたと考えます。この位置づけは、教育は子どもの内在的成長の重視に置かれるべきであるという主張との対比の中で、はじめに示したプラトンを強権的な考え方から特徴付ける方向に繋がってきていると考えます。

これに対して、プラトンが魂の目の向き直りを教育としていたという位置付けから一貫したプラトンの考え方が展開できてはいないのかと発表者は考えます。それがあれば、自発的な自分の心に手を当てて子ども達が成長していく発端になるのではないかと考えています。発表者は十分ではありませんが、ポリテア第六巻と第七巻の中で端的に取り上げられる善のアイデアについて子ども達の内在的成長の結果、子ども達が理解できるという繋がりが根拠付けられていれば、これまでの教育学の中での解釈を見直すことができないかと考えています。子ども達の目指す先に、プラトンの描いた正義や、形だけでなく行いの美しさ

が得られてくる道筋、それがまた対話法の中で行われうる、をこれまでのプラトン研究の中に確認することで、今日の道德教育の授業の中で応用されているコールバーグの授業展開にも矛盾しない、また幼児教育で使用されているフレーベルの恩物教材にも反映できるプラトンの位置づけが可能ではないかと考えます。それぞれの子が求める善さが対話法の中でより善さに向かう要件を哲学に教えていただければと考えて発表いたしました。

多角的な面からのご指摘を参考にして、今後仕切り直して考えていきたいと存じます。